

2021 年度「未来起点ゼミ」の実践

郭麗娟・角田彩乃

お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所

Practical Report on the Backcasting Future Visions Seminar 2021

Reiken KAKU and Ayano TSUNODA

Ochanomizu University; Institute for Global Leadership

In this class, we employed backcasting thinking to predict social problems that could emerge in the near future and asked students to make proposals related to the future society in which they wish to live through dialog among themselves, teachers, and outside lecturers on the kind of efforts that should be implemented currently. During the first semester, we invited lecturers with various specialties to conduct lectures. This not enabled students to learn perspectives on social issues, acquire tips on how to make presentations but also afforded them opportunities for self-reflection and enhanced their interest in social issues. In the second semester, students formed groups in which they examined their own issues, summarized them as a single theme, and subsequently conducted a final presentation. Throughout the whole year, students learned new perspectives on social issues. They also demonstrated team building and leadership skills through group presentations and the management of the presentation. During the course of next year, we intend to employ active learning to encourage students to learn independently and develop their own leadership skills.

Keywords: Backcasting Thinking, Social Problems, Dialog, Teamwork, Active learning

はじめに

2021 年度、新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、社会経済、家族、個人への様々な影響が長引くようになった。社会環境が大きく変化し、新たな社会問題や現象が発生するようになった。新型コロナウイルス感染症によってもたらされた様々な被害や危機に上手に対応できず、倒産や社会から淘汰される企業が多く現れる一方、IT 技術を駆使し、オンライン上ならではの新しい働き方やビジネスのあり方も多く生まれた。同様に、教育領域においても、オンライン講義ならではの良さと強みを活かし、教育の変革が起きている。

2021 年度の「未来起点ゼミ」もこのような環境変化の中で、オンライン講義の強みを活かし、学生主体のアクティブラーニングの講義を展開してきた。2020 年度にオンライン講義を実施・受講した経験から、2021 年度のオンライン講義は、教員も学生も慣れた様子であった。2 年目のオンライン講義では、オ

ンライン講義のメリットをさらに活かし、学生の主体的な学びと教育実践を行うことを目標としている。

本稿は、お茶の水女子大学・株式会社ブリヂストンの社会連携講座 2021 年度「未来起点ゼミ（大学院では未来起点研究）」受講生へのアンケート調査結果＊1 とインタビュー調査結果＊2 をまとめ、今年度の成果と課題を提示することを目的とする。

「未来起点ゼミ」の概要

株式会社ブリヂストンとお茶の水女子大学は未来の女性リーダーの創出を狙い、社会連携講座「未来起点ゼミ（大学院では未来起点研究）」を 2019 年度より開講し、2021 年度で 3 年目になった。2021 年度の前期では、「自分の軸」を探求し、今、世の中で起きている様々な問題（社会課題）を理解すること、社会と自分とのつながりの認識を深めるために、社会問題をシステム思考から捉え、その背景について理解し、自分の取り組みたい社会問題を他者に伝えるために

Table1 前期「未来起点ゼミⅠ」シラバス

1	4/22	ゼミの概要と進め方 ビジネスによる社会課題解決：あなたが解く社会課題	角田・郭 玉川絵里
2	5/6	共同ワークショップ①：なぜ今「話す力」が必要か	竹内明日香
3	5/13	共同ワークショップ②：ストーリーを語る＋スライドで魅せる極意	竹内明日香
4	5/20	共同ワークショップ③：ミニ発表	竹内明日香
5	5/27	共同ワークショップ④：内発的動機・対話	森博樹
6	6/3	問題を構造化する	福谷彰鴻
7	6/10	2020 年度履修生から/グラフィックレコーディング	2020 年度履修生・本園大介
8	6/17	カードゲームを通して、SDGs の本質を知ろう	那須里美
9	6/24	担当教員による Q&A	角田・郭
10	7/1	日本で暮らす外国人・日本で働く外国人・日本で学ぶ外国人	原田麻里子
11	7/8	前期末発表①	角田・郭
12	7/15	前期末発表②	角田・郭

のようなプレゼン力と表現力が必要なのかを学ぶこと、また、他者の問題関心を傾聴する力を上げるようにした。さらに、社会問題に取り組みたい自分の内発的動機は何かについて考えてもらうとともに、社会問題に取り組む際には、他者との対話が大切であることも学べるようにした。

後期では、自分の目標を維持しながら、グループでの目標を設定し、提言につなげること、メンバーそれぞれのリーダーシップを発揮すること、他のメンバーの為に何ができるかを考えて行動することを目標としている。本ゼミの一番の特徴は、学生同士、外部講師、教員との対話によるアクティブラーニングによって未来の社会価値を創造することであった。これは開講して以来一貫している。2019 年度、2020 年度と一番異なっている点と言えば、2021 年度の後期に、学生にグループで一つのテーマを発表してもらうことであった。グループ発表は未来起点ゼミにとって初めての挑戦であり、学生同士のチームビルディングをいかに構築するのかが大きな試練であった。後期のわずかの数か月間、25 名から 6 グループが形成され、発表テーマのみならず、2021 年度の「未来起点フォーラム」の運営も、学生が主体的に担当し、チームワークを経験しながら、最終的な目標にたどり着いた。

2021 年度の講義は前期 12 回、後期 13 回である。前期は社会課題の認識を深めるとともに、システム思考・グラフィックレコーディングなどの専門家を招いての講義と対話を通じ、自分が実現したい社会を描くことを目標にした。後期の目標は、2030 年にありたい自分と社会の実現に向けてのエコシステムをグループで考案し、「未来起点フォーラム」(以下、フォーラム)で提言することであった。シラバスは Table1 と Table2 を参照されたい。

Table2 後期「未来起点ゼミⅡ」シラバス

1	10/7	後期の進め方・テーマの共有・グループ決定	角田・郭
2	10/14	テーマの話し合い・グループの役割決定	角田・郭
3	10/21	ミニ講義「チームでプロジェクトを進めるためのヒント」 テーマ・フォーラム運営の話し合い	小原大樹 角田・郭
4	10/28	テーマ・フォーラム運営の話し合い	角田・郭
5	11/4	テーマ・フォーラム運営の話し合い	角田・郭
6	11/11	中間報告・フォーラム運営進捗確認	角田・郭
7	11/18	アドバイザーによるアドバイス①	小原大樹・増谷真紀
8	11/25	テーマ・フォーラム運営の話し合い(対面授業)	角田・郭
9	12/2	テーマ・フォーラム運営の話し合い	角田・郭
10	12/9	アドバイザーによるアドバイス②	玉川絵里・根本真紀
11	12/16	テーマ・フォーラム運営の話し合い(対面授業)	角田・郭
12	1/13	リハーサル	角田・郭
13	1/20	未来起点フォーラム	角田・郭

2021 年度前期の受講生については、附属高校生 7 名、学部生 28 名(文教育学部 10 名、理学部 3 名、生活科学部 15 名)、合計 35 名であった。後期の受講生については、附属高校生 6 名、学部生 19 名(文教育学部 6 名、理学部 1 名、生活科学部 12 名)、合計 25 名であった。本講義は外部講師や教員との対話によるアクティブラーニング、学年・専攻の異なる学生の対話を重視し、毎回の講義で、対話の時間を長く設けている点が特徴的である。

アンケート調査の結果

2021 年度「未来起点ゼミ」の受講生にこれまでのリーダーシップの経験、希望するライフコース、キャリアを考えるヒント、昇進希望、「未来起点ゼミ」を受講しての意識の変化、社会課題の認識の変化などについて、前期末(2021 年 7 月 15 日)、後期末(2021 年 1 月 20 日)に計 2 回同様のアンケート調査を実施した。前期末のアンケートについては、35 人の履修者のうち 3 三人(回答率 94%)から、後期のアンケートについては、25 人の履修者のうち 2 三人(回答率 92%)から回答を得た。以下、前期末 2021 年 7 月 15 日の調査結果を図で示しながら(後期末 2022 年 1 月 20 日の調査結果は割合のみ提示する)、アンケート調査の結果をまとめる。なお、アンケート調査の実施にあたって、お茶の水女子大学の倫理審査を受けている。

これまでのリーダーシップを発揮した経験について

「あなたのこれまでのリーダーの経験は、自ら進んでであった」という質問に「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「まったく思わない」の 5 件法でたずねた。

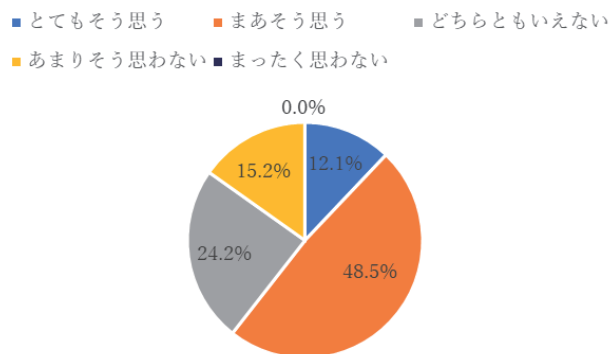


Figure 1 自発的にリーダーの役割を担った経験

その結果が Figure 1 である。「とてもそう思う」と「まあそう思う」をあわせて 60.6%(後期末 60.8%)であり、受講生の半数以上がこれまで積極的にリーダーの経験をしてきたことがわかる。

これまでのリーダーの経験から思ったこと

「あなたのこれまでのリーダーの経験は自分にとって良かった」、「人生の勉強になった」、「辛抱強くなった」などを 10 項目挙げて、それぞれに上記の「とてもそう思う」から「まったく思わない」の 5 件法で回答してもらった。その結果は Figure2 である。

「人生の勉強になった」は「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると前期末 94%(後期末 96%)、「自分にとって良かった」は「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると前期末 94%(後期末 91%)という結果であった。「視野が広がった」は「とてもそう思う」、「まあそう思う」を合わせて前期末

66%(後期末 87%)という結果であり、リーダーの経験を前向きに受け止めていることがうかがえる。一方で、「多くの時間を割かれた」は「とてもそう思う」、「まあそう思う」を合わせて前期末 78%(後期末 87%)という結果であり、前期より後期のほうが「未来起点フォーラム」の準備により多くの時間を費やしたことがわかる。また、「責任が重かった」は「とてもそう思う」、「まあそう思う」を合わせて前期末 68%(後期末 74%)となっており、ネガティブな回答もあるため、リーダーとして苦勞した経験もあったようである。特に、後期は受講生が主体となって「未来起点フォーラム」の開催に向けて、運営の役割分担をして準備を進めていたこともあり、後期は前期より負担が重かった。リーダーの経験を通しての苦勞があったが、それでも「またやりたい」という回答は「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせて前期末 72%(後期末 70%)という結果であり、7 割が再度挑戦したい意識が見られた。

社会人になって何かのリーダーになりたいか

将来、何かのリーダーになる希望があるかを尋ねた。「社会人になって何かの組織やグループのリーダーになりたいですか」の問いに「とてもそう思う」から「まったく思わない」までの 5 件法でたずねた。結果は Figure3 に示している。「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると前期末 75.8%(後期末 82.6%)であった。将来、社会人になってからリーダーとして活躍したいと高い意欲を示している学生が多数いることがわかる。「未来起点ゼミ」は次世代女性リー

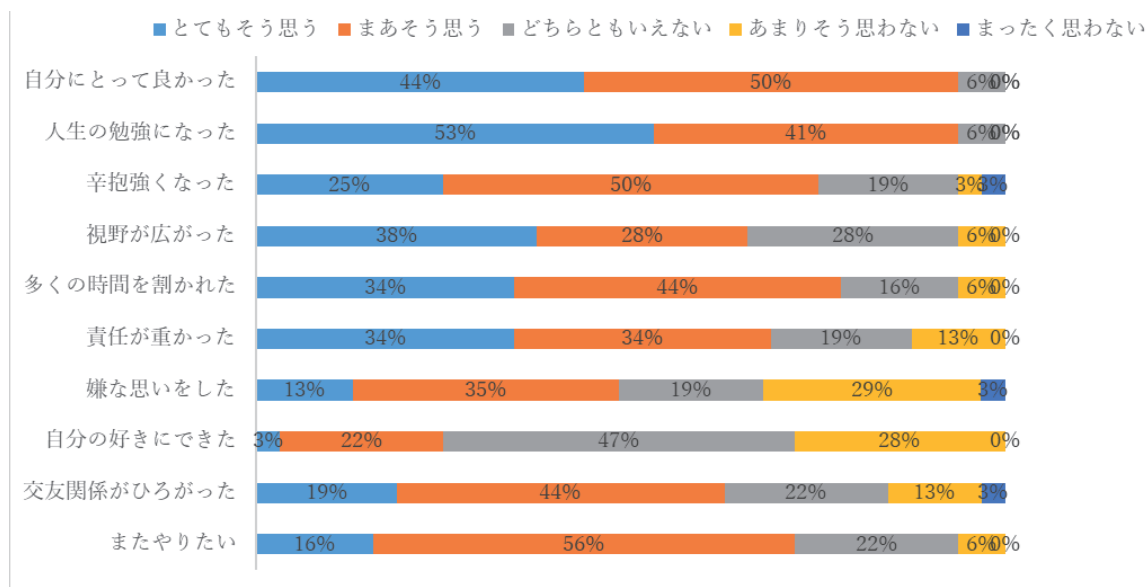


Figure2 これまでのリーダーの経験から

■ とてもそう思う ■ まあそう思う ■ どちらともいえない
■ あまりそう思わない ■ まったく思わない

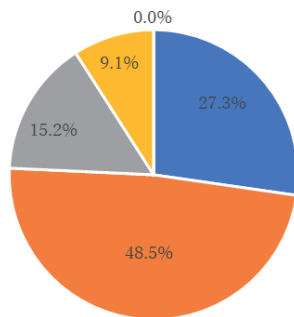


Figure3 社会人になって何かの組織やグループのリーダーにいずれなりたいですか？

ダーの育成の一環として開講された講義であり、この結果からもわかるように、本講義の一つの目標が達成されたのではないかと考える。

希望するライフコース

希望するライフコースについての意識を見よう。「あなたが将来希望するライフコースはどれですか」という質問に、「専業主婦コース」「再就職コース」「両立コース」「DINKS コース」「非婚就業コース」の選択肢から選んでもらった。結果は Figure4 に示している。「両立コース」は 69.7%(後期末 60.9%)という結果であった。また、「非婚就業コース」は前期末 9.1%、後期末は 13% であり、「DINKS コース」は前期末 12.1%、後期末は 17.4% であった。将来、家族形成の面において、結婚せず、または、結婚するが子どもを持たず、就労を継続することを希望する人が一定の割合でいることがわかる。家族に関する多様な生き方やライフコース選択がみられた。ほかに、「専業主婦コース」を選んだ人は前期末と後期末両方ともいなかった。ほとんどの受講生たちにとって、働くことが将来のライフコースの中で大きな比重を占めていることが分かる。

キャリアを考えるヒント

「自分のキャリアを考えるヒントになった人はいいますか」という問いに、10 の選択肢の中から選んでもらった(複数回答可)。結果は Figure5 に示している。「母親」48.4%(後期末 43.5%)、「女性教員」48.4%(後期末 65.2%)のように、年上の同性からヒントを得ている割合が高いことがわかる。続いて、「有名人」38.7%(後期末 56.5%)、「父親」19.4%(後期末 21.7%)、「バイト先の人」19.4%(後期末 17.4%)

■ 専業主婦コース ■ 再就職コース ■ 両立コース
■ DINKS コース ■ 非婚就業コース ■ その他

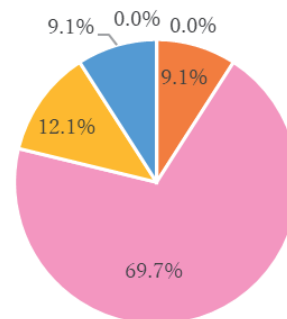


Figure4 将来希望するライフコース

も一定の割合を占めていることがわかる。キャリアを考える上で、母親などの身近な女性がロールモデルになるだけではなく、有名人や、父親、バイト先の人といったような身近な存在も挙げられていた。ほかに、「その他」を選んだ人は、自分の同級生や自分より年上の先輩、大学の授業を通してお話を聞いた社会人の方を挙げていた。全体的に、ロールモデルは性別や年齢、身分などを問わない傾向がみられた。

昇進の希望

「将来はどの役職までつくことを考えていますか」の問いについては、Figure6 に示したとおりである。「役職なし」という回答が前期末も後期末も 0% であった。「役員・経営者」希望が 21.2%(後期末 26.1%)であった。「本部長」は 9.1%(後期末 8.7%)、「部長」は 9.1%(後期末 13%)、「課長」は前期末も後期末も 0% であった。管理職になることを希望している受講生は、前期では 4 割弱で、後期では 5 割弱いることがわかった。一方で、「考えたことがない」という回答が 54.6%(後期末 39.1%) であった。受講生は前期末では、将来の役職を「今まで考えたことがない」とした割合は 50% 以上であったが、後期末になると、4 割弱まで減少した。1 年間の「未来起点ゼミ」の受講を通して、一部の受講生は将来の職位について自ら考えるようになったという変化が顕著にみられた。女性リーダーを育成することを目標とする本講義への受講によって、将来の職位について、昇進の意欲が一部の学生の中で高まったことがとても喜ばしい結果といえる。

2021 年度「未来起点ゼミ」を受講しての意識の変化

未来起点ゼミを受講してどう思っているかを質問し

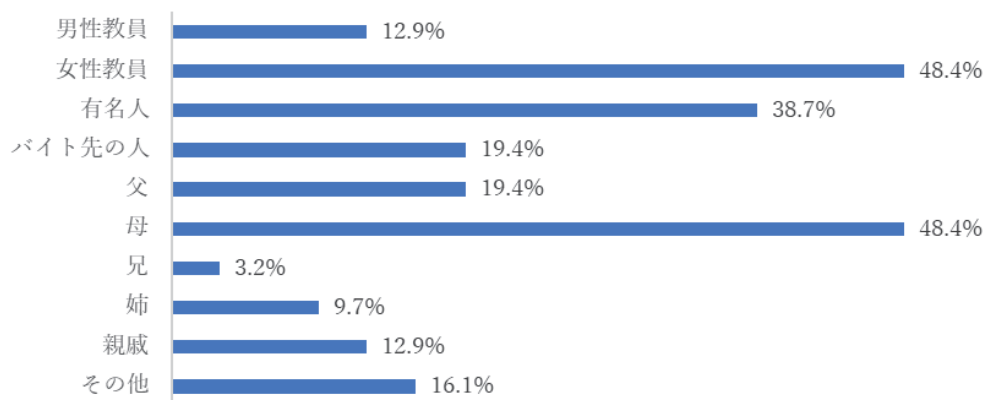


Figure5 自分のキャリアを考えるヒントになった人はいいますか？

た。前期末の回答結果を Figure7 で示す。

前期末において、「とてもあてはまる」の回答が最も多かったものは、「自分とは違う価値観に気づいた」であり、70%であった。続いて、「未来について具体的に考えるようになった」が67%であった。多くの受講生は自分の未来について具体的に考えられるようになっただけではなく、様々な分野で活躍されている外部講師の方との対話や他の受講生との意見交換により、多様な価値観があることに気づいたようである。一方、後期末、「とてもあてはまる」の回答が最も多かったのは、「自分の思ったことを発言した」(74%)であった。続いて、「自分とは違う価値観に気づいた」と「自ら他者とコミュニケーションをとった」がともに70%であった。今年度の「未来起点ゼミ」では、高校生から大学生まで、異なる学年や異なる専攻の受講生が一緒に対話をしたり、数人でグループになり、

それぞれのテーマについて意見交換をしたり、後期では、グループで一つのテーマを発表したりというアクティブラーニングの手法を用いている。また、講義では、担当教員、外部講師とブリヂストンの社員との交流機会も設けられている。さらに、後期では、未来起点フォーラムの運営において、受講生全員に役割を分担し、進めてもらうようにした。毎回の講義で対話の時間が多くあり、受講生に自分の考えを他者に伝える機会を多く与えていた。前期の初回講義の振り返りシートから、「自信がない」、「他人の前で発言することが苦手」という意識を持つ学生が多数いたが、1年間の受講を通して、自信を持って、自ら自分の考えを他者に向けて発言できるようになった。「未来起点ゼミ」は受講生が気軽に対話する土壌を形成できているということが言えるのではないだろうか。このような話しやすい土壌はグループワークへの参加意欲の高さ

■ 役員・経営者 ■ 本部長 ■ 部長 ■ 課長
■ 係長・主任 ■ 役職なし ■ フリーランス ■ 考えたことがない

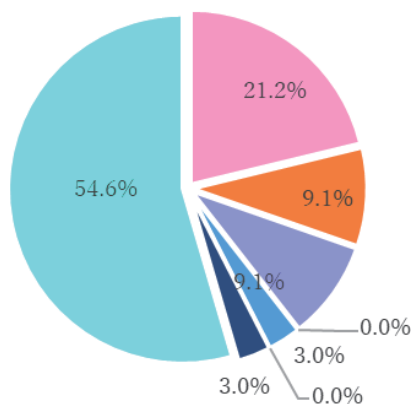


Figure6 将来はどのような役職までつくことを考えていますか？

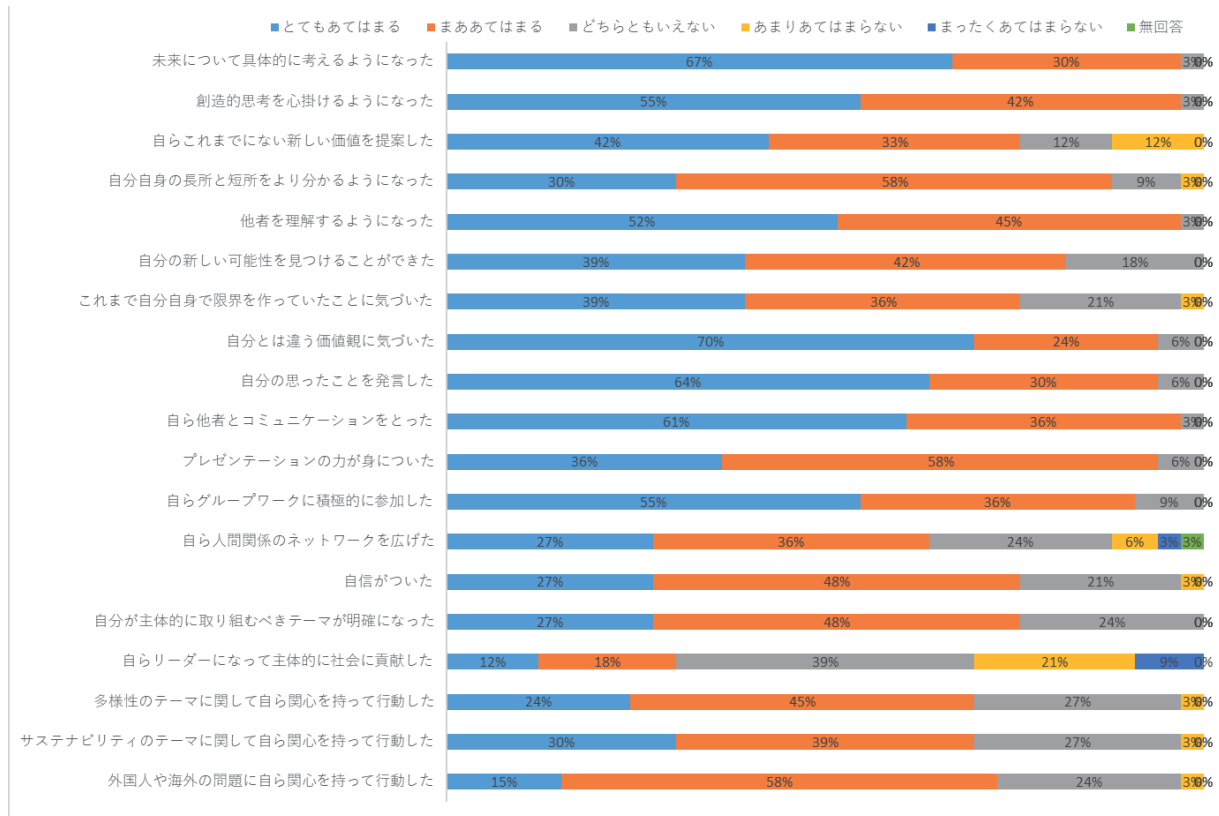


Figure7 未来起点ゼミを受講して

にもつながったと言える。例えば、「自らグループワークに積極的に参加した」は、「とてもあてはまる」、「まああてはまる」を合わせて91%(後期末87%)であった。昨年度と異なり、今年度の講義では、グループワークの時間をさらに増やしていた。また、後期は、グループで一つのテーマを発表するという目標を設定したので、受講生はグループで意見交換し、お互いに学習することが必要であった。さらに、最後の「未来起点フォーラム」での運営は全員で役割分担を決め、進めていたので、グループの一員としてグループワークに参加することを求めている。これらの経験を通して、チームワークの大切さを体感したのではないかと予測する。

一方で課題も見えてきた。前期末、「自らリーダーになって主体的に社会に貢献した」は「とてもあてはまる」が12%であり、「外国人や海外の問題に自ら関心を持って行動した」は「とてもあてはまる」が15%であった。この二つは他の項目と比較しても低い。また、「多様性のテーマに関して自ら関心を持って行動した」について、「とてもあてはまる」が24%である。それに対して、後期末、「外国人や海外の問題に自ら関心を持って行動した」は「とてもあてはま

る」が13%であった。社会への貢献、または海外の問題に関心を持って行動することができなかったようである。これについては、引き続き次年度の課題とした。

1 年間受講しての社会課題の認識の変化

「未来起点ゼミを受講して、自身の社会課題の認識が高まった」という項目の結果はFigure8に示した。これについて、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると、前期末は93.9%、後期末は100%であった。1年間の受講を通して、受講生は自分の周りの社会課題についてかなり意識するようになったと言える。このような結果は、今後、受講生が自ら社会課題に取り組む原動力となるであろうことを示唆している。

インタビュー調査の結果

2021年度、「未来起点ゼミ(企・協)」を開講し、2020年度を受講生4名が引き続き受講した。2021年度では、上記の4名の受講生を対象に、2年目の受講を通して、意識にどのような変化があったのかについて、2021年8月～9月にインタビュー調査を実施した。

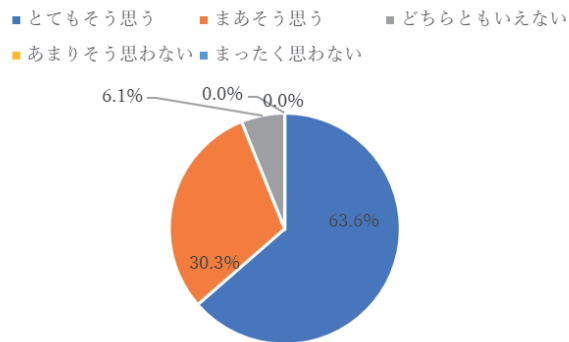


Figure8 未来起点ゼミを受講して自身の社会課題の認識が高まった

なお、インタビュー調査の実施にあたって、お茶の水女子大学の倫理審査を受けている。

以下、「未来起点ゼミ」2年間を受講して、自分自身の変化について、「未来起点ゼミ」の受講を通した、職業キャリア意識の変化について、「未来起点ゼミ」の受講生たちとの共創について、1年目と2年目の受講について、自分自身のリーダーシップについて、4名の学生のインタビュー調査の結果を提示する。

自分自身の変化について

2年間「未来起点ゼミ」を受講して、自分自身はどのような変化がみられたのだろうか。これについて、以下の回答があった。

- ・物事に対するアプローチの仕方が少し変わったかなって思います。
- ・行動に移せるようになったことだと思います。漠然としていた思いだったのが、未来起点ゼミを受講したことで、自分が実際に何をどうしたいのかっていうのが見えてきて、実際にそれを行動に移してる人とかを見たり、話を聞いたりして、自分もやろうっていう気持ちになれて、行動できるようになったことが一番の変化かなと思います。
- ・自分が何か思っていることとか、こうしたいなって思っていることに対して動けるようになったっていうのが位一番の変化かなと思います。
- ・前の自分が結構漠然としか、自分のやりたいこととか、将来のことを考えてこなかったのが、未来起点ゼミを通して、自分がどういう社会問題に関心を持っているとか、どういうアクションを取りたいとか、どういう理念や価値観を持っているかということ、より

り明確にできました。

上記から、物事のアプローチの仕方が変わった、行動するようになった、自分の社会問題への関心がより明確になったといった変化が述べられた。4人とも大学に入学した年から「未来起点ゼミ」を受講した。入学時から2年間を経て、物事への捉え方、アプローチの方法が変化し、さらに社会問題に対して自ら行動を起こした。1年目は自分の取り組みたい社会問題についての提言を目標としており、2年目は、自分の提言を実際に実行することが目標であった。受講生は「未来起点ゼミ」を通して、社会問題を捉える自らの視点を獲得し、さらに、自分の提言を具体的な実践に落としていく行動から、本人自身の様々な能力が発揮され、それを本人自身が気づいたのは一番の成果であると言える。

「未来起点ゼミ」の受講を通した、職業キャリア意識の変化について

続いて、「未来起点ゼミ」を受講して、職業キャリア意識がどのように変化したのかをみよう。

- ・もともとやりたいことが決まっていたので、そこに、大きく未来起点ゼミが影響したということはあんまり無いかなって思ってます。
- ・1年目は、自分の学科からは管理栄養士になるか研究職になるかしかないと考えていたのですが、職業選択の視野や幅は広がったような気がします。何か具体的にその職業について知ったっていうよりかは、こういう世界もあるんだみたいな新しい可能性を見せてもらったと思います。
- ・1年の時に仕事へのイメージが、今までみたいなネガティブでなんか疲れるとか、そういったイメージのものから、自分がやりたい事とかに取り組んでる方を見てきて、こういう働き方もあるんだっていうのを知って、自分がやりたいことを、楽しくできるんだっていうのをそこで知って。やっぱりその1年のときは自分、働くっていうと、企業に勤めるイメージが強くて、社会課題解決型企業みたいなのを授業の中で知ったんですけど、そういうのいいなあっていうのを漠然と考えていました。2年目は私が今トレードについて活動して、その活動はAさんとしているんですけど、Aさんは、NGOのインターンとかに参加して

いて、週に 1 日一緒に話したりとかするんですけど、その中で職業とか将来どうしたいとか話すようになってなんか、企業とかじゃなくてもいいのかなとか。公務員とかでもいいのかなという。今までは、だいたい OL になるんだろうというか、大企業とかに、必死に就活してるのかなとか思っていたんですけど、もう少し他の選択肢も見えるようになったので、すごいありがたいことだなと思っています。

・1 年目は、私の場合はジェンダーとか女性にかかわる問題に興味があるということを知りました。そして後期に、二人のインタビューしか行えなかったんですけど、お話を実際に伺いに行ったりできたので、行動をとることの大事さとか、こうした方がいいとか、恐れずに行動をとってもいいみたいなことにも気づいたので。2 年目は、一歩先で三歩下がりみたいな感じになってしまったんですけど、やっぱりクリエイティブティが自分にとって重要だなと気づきました。

上記の回答から、「未来起点ゼミ」の受講は自分の職業キャリア意識にさほど影響を与えていないという回答や、職業選択の視野が広がったという回答があった。一方、1 年目の授業では自分の興味関心について知り、行動の大事さを学び、2 年目は一時的に停滞の時期もみられるものの、最後に再び自身の強みはどこにあるのかに気づいたという回答もあった。この回答からの気づきは本人の将来の職業キャリアを考える上でも有益であると言える。ここからも分かるように、「未来起点ゼミ」を受講して、自分自身について考える時間がたくさんあり、学生は時間とともに、自身について知り、振り返り、また試行錯誤して、自身について探求している様子がうかがえた。

「未来起点ゼミ」の受講生たちとの共創について
「未来起点ゼミ」では、異なる年齢、学部、学科の学生が一堂に集まり、様々な社会問題について話し合ったり、ワークをしたりした。とりわけ、後期では、グループで一つのテーマを発表し、また、「未来起点フォーラム」の運営において全員で役割を分担していた。この意味においては、受講生同士の共創が非常に大事である。これについて、4 名の学生に「他の受講生たちと共創関係をつくることは必要だと思いますか？なぜそのように思いますか？」と尋ねてみた。以下は 4 名の回答である。

・作ることは大切だと思います。なかなか一つの取り組みについて、一人で進めていくのは、途中で心が折れそうになったりすると思うんですけど、一緒に何か想いを共有することで、違う視点からアドバイスをもらったり、あの子も頑張ってるんだったら自分も頑張ろうって思ったりできるし、2030 年に良い未来を作るためっていうのをシェアできているので、何か同じものを作っていくっていうのは凄い意義があると感じています。

・共創関係は大事だと思います。1 年生の時に、フォーラムの前に考えが煮詰まっちゃったり、新しい考えが浮かばないことがあったんですけど、ゼミ生の意見とか考えとか、発表でのそれぞれの分野は違うけど、取り組んでるところを見て、一人での考えに煮詰まった自分から解放してくれたりすることがあったので、すごく大事だなと思います。いろんな意見があるっていうところがすごくいいなと思います。

・必要というか、すごい大事だなと思います。今は未来起点ゼミ(会)の方で、毎回定例ミーティングとかで進捗を報告して、ゼミ生とか先生からアドバイスをいただいているんですけど、別の事を今しているんですけど、アドバイスされていると、結構共通していることとかも見えてきたりする。なんか違うテーマだったけど、次一緒にやってみようみたいな、新しく組み合わせたりとか生み出したりとかをすることができるし、それは自分にとっても、その次に進めるというか、そういった過程があると、やっぱりなんか自分としてもやっていて楽しいので。今の関係は共創関係に近いものかなと思うんですけど、もうやっていて、自分も楽しくできているので、必要かなと思います。

・必要だと思います。お互いを励まし合うことによって、ひとりじゃないなという安心感がありますし、精神的に安定できるというか、とてもいい気分になると思うので、頑張れると思います。あとは、こういう文献もあるけど、見てみたらみたいな、ゼミ(会)の定例会で結構あったので、自分のやりたい事とか自分の取り組みたいテーマ、課題も、ますます変化していくと思います。

4 名の回答から共通してうかがえたのは、他の受講生との共創関係の大事さである。未来起点フォーラムの運営であろうが、自分の課題に向き合う過程である

うが、他の受講生からの協力が必要不可欠である。なぜなら、他の受講生の意見から意外と重要なヒントを得たりすることができるからである。そして、何より、学生同士でお互いに励まし合う関係性がお互いにより影響を与えるということが語られた。「未来起点ゼミ」は、アクティブラーニングの手法を採用している。このような授業形態によって、学生同士の関わりが緊密になりやすく、したがって、お互いに学び・刺激する機会も多い。このような環境の中では、学生の共創関係が生まれやすいのである。

1 年目と 2 年目の受講について

2 年間を通して「未来起点ゼミ」を受講し、1 年目と 2 年目はそれぞれどのような学びと気づきがあったのか。以下の語りを紹介する。

・結構オンライン授業なので、ほとんど大学の人と知り合っていなかったんですね。私は知り合いがほとんどいなくて、未来起点ゼミを受講したことによって、お茶大生との交流もあって、ちゃんとお話も出来ました。だからそれはすごくありがたいなと思いましたし、結構、有意義な時間も過ごしてたなと思いました。

・1 年目、私が知らなかったというか、あまり興味が無かった社会問題とかについて知ることができたのが、すごいよかったなと思って。2 年目は自分が興味を持っている、普通だと話しにくいようなことを話せる関係ができたのが、すごいよかったなって思ってます。

・1 年目の時に自分の意見を受け入れてくれる人とかそれに発見を持ってくれる人とかがたくさんいたので、自分の意見や考えに自信が持てるようになったし、あと、相手の意見も同じように、自分の中に取り入れていこうという気持ちになれました。2 年目は、今まで描いてきたものを実行に移すっていう段階で、言うのは簡単だったなとか、言うのと行動するのは違うんだってっていうのも、すごい学んだ。

・1 年目のときは、やりたい事とかを、見つけるというか、そういったことを考える期間で 2 年目は実際にやってみるっていうことだと思うんですけど、世界は変えられるんだよみたいな内容の授業を受けて、それに結構感動して、変えたいなと思ってやってきた

んですけど、企業とか外部の方とかに声をかけると、やっぱり声をかけてみれば、何かしらのリアクションをもらえるっていうのが分かって、確かに少しだけけど、自分たちでも少しは変化を作れるんだっていうことが知れた。

アンケート調査の結果からも「未来起点ゼミ」の対話の土壌が出来つつあることに言及した。このような土壌では、学生同士で気軽に自らの問題関心を話し合える関係性が構築されたと言える。とりわけ、新型コロナウイルス感染症の影響により、ほとんどの講義がオンラインとなった環境では、「未来起点ゼミ」が学生に交流の時間を提供したことはとても意味のあることだと考える。学生同士が綿密に対話を通して、自らの問題関心や意見を述べ、個人の自信を高めることができるだけではなく、2 年目の各自の実践へのモチベーションにもつなげることができると言える。ほかに、1 年目に比べて、2 年目の受講は特に、企業や外部とのつながりを意識し、行動を起こすことの重要性を体得したのではないだろうか。

自分自身のリーダーシップについて

「未来起点ゼミ」は次世代女性リーダーの育成を目標としている。2 年目の受講により、4 名の学生は自分自身のリーダーシップについて、どのように捉えているのだろうか。これについて、「自分自身のリーダーシップについて、どのように考えていますか」と尋ねた。

・リーダーシップはいろんな人、そこに居るメンバーをみんな巻き込んで話を進めていく力かなと思って、それは必ずしも一人で先頭に立って引っ張っていくんじゃなくて、輪の中に入って、一緒に歩いていくような感じだと思っています。こういう風にしたらどうか、みんなの意見をうまい具合に取りまとめることができるような能力をリーダーシップというのになって思います。

・前期は、先輩というか、1 年授業を取っているということもあって、ゼミ(特生)がイベントに参加してくれたりとか、呼びかけにに応じてくれたりして、自分が前期で引っ張ることができたのは、経験があったからかなと思っているので、ぶれない軸というか、自分がこうしたいという確固たる思いがあれば、自然とついてきてくれる人がいるのかなというのを、学びました。

・リーダーとかがここら辺(上)にいたら、他の人はここ(下)みたいな感じだったんですけど、そういうよりはみんな同じにいて、作っていくものかなっていう。みんなが同じ目線で参加できると、自ずとリーダーシップっていうものが全員に生まれてくるというか、そういうイメージをしていて。そういった環境を作るっていうのもまた一つのリーダーシップという風に思っています。

・後期になってから、リーダーシップをとる機会が多かった気がします。なんとなく自分が全体調整、いろんな子と連絡取ったりとか、誰が何をすればいいかを決めたりとか、そういう役割をしたというか、役割を取ることにしたので、リーダーシップを体験できたなと思っていて、それまでは、そのグループの進行とかも、日本ではやる機会がほとんどなかったので、それが経験できて勉強になったと思います。それが俗になると、先輩的な立場に就いてしまったので、よりリーダーシップを取る立場にもなって。アドバイスとか指導まではいかなかったと思うんですけど。こうすればいいんじゃないかなとか、より自由に発言とかも出来たなと思っていましたし、グループでのコミュニケーションをとりやすくなるように務めた方が良かったねっていうことにも気付きました。

これらの回答から分かるように、みんなと同じ目線で、皆の意見を取りまとめる力、周りを巻き込む力の重要性が言及されていた。また、自分の軸がぶれなければ、自然と人がついてきてくれるという体験をした学生は、リーダーシップの重要な要素である自分軸に気づいて、それを持つことの大切さを学んだという。

さらに、後期の「未来起点フォーラム」の運営に関するタスクをどのように全員に振り分け、グループ間のタスクをいかに調整し、各メンバーとどのように連絡するのかについて、全体調整役を担った学生からは、リーダーシップを身につけることを多く経験したことがうかがえた。このことから分かるように、講義以外に、「未来起点フォーラム」の運営を学生主体で行うことが、リーダーシップを育成するよい機会になっていると言える。

成果

自己の軸 / 内発的動機

自己の軸 / 内発的動機の認識は引き続き本ゼミにおける主要なテーマの一つである。これから社会に飛び立つ当学の学生は大きな活躍が期待されるが、これからは今ある課題を解決する力というより、自ら主体的に創造的に課題を発見する力、一人の力ではなく周りを巻き込んで課題を解決していく力が重要になってくる。そこには、オーナーシップを持ち、やりぬく粘り強さが必要となる。長期の複雑な問題への対応はうまくいかないことの方が多く出口の見えない時もある。そのようなときにも進んでいくためには、なぜ「私」がこの問題解決にあたるのか、自分の中での答えが必要となると思われるからである。

対話

本ゼミでは各回ゼミ生同士の対話の時間を必ず設けている。活発な意見交換のためには対話の土壌が必要であるが、単に話合いの時間を設けるだけでは育たない。まずは土を耕すことが必要である。授業の設計にあたって初回は場が温まっていないことを前提に回数を重ねるごとに活発になるという仕掛けが必要である。自己開示には少し時間が必要であるが、場作りによってそれを加速することは可能である。

心理的安全性と多様性

心理的安全性ということがよく言われるが、これまでの多くの学校教育で「正解」を求められてきた我々は、こんなことを言ったらおかしいのでは？相手の求める正解は何か？とつい自分の考えを発言することを抑えてしまうことがある。「異なる意見を持つことに引け目を感じていた」という学生がいたが、これは同調圧力とも言われる。こうした状態では話をしてもお互いの違いは認識されず、議論が深まることもない。個々が自分の言葉で発言できる場を作り、お互いの意見が異なることも認識し、その上で自分も他人と異なってもよいし異なることは自然であるということを対話を通じて実感してもらうというのが本ゼミの狙いである。何を言っても大丈夫という安心感のある場とするために、今年もゼミでは毎回対話のルールを提示している。「一人ずつ話をする」、「意見の違いは保留する」である。違いを前提として話を聞くことにより、自他の違いがより明確になり、どちらが正解でもないことも実感する。違いがむしろ自然となれば、多様な意見が出しやすくなる循環が生まれる。

社会課題の認識 / 社会とのつながり

昨年度の課題感から引き続き社会課題については初回から講義を設けている。振返りシートでは、「何となく耳にしていただけで身近に感じてこなかった」、「大学生にできることは限られていると思っていた」という学生が多かった。外部講師の事例紹介や起こしてきた変化を聞き、「誰しも日常的に困りごとを抱えている」、「自分の力では無理だからと諦めるのではなく、周りの人を頼ることもできる」「高校生や大学生でも社会問題を解決する手立てはあるし、実際に解決に向けて行動していかないといけない」というように自分にも何かできるかもしれないという声が多く見られた。

また、自己と社会とのつながりの理解について、ゼミではシステム思考講義を取り入れている。冰山モデルを使い、起こっているできごとそのものを問題と捉えるのではなく、それを引き起こしているシステム構造をメンタルモデルと制度や仕組みの観点から考えたり、事例を使って一見自分とは無関係な問題も元をたどると自分にもつながっていること、また、見えるつながりが全てではないことを理解することが講義の目的である。今年度システム思考の回では、状況がわからない中での専門家の判断が結果多くの人の命を奪ってしまったという事例を扱った。事後の判断でこうすればよかったというのは簡単であるが、実際はそうのように単純ではなくむしろ限られた一部の情報のみで即座に判断を迫られるような状況の方が多いのではないか。誰が悪かったという犯人探しではなく、その背後のシステムの理解や自分から見えているものが全てではないという謙虚さを持ち、自分が見えていないものを見ようしたり耳を傾けたりすることで、背後にあるシステムがより浮き彫りになってくる。”「全体が見えないこと」が問題なのではなく、「全体が見えていないことが意識できない」とき不都合が起きる”が講師の福谷氏のメッセージであった。このゼミでは対話の重要性を繰り返し伝えているが、それは、自分が知らないものや、自分から見えないものを知る手がかりとなるからである。

共創

今年度は「未来起点フォーラム」でのテーマ発表をグループ発表としたため、共創により起こることを体験する機会が必要であると考えた。前期講義のSDGsカードゲームでは、三人一組でアイデア発想のワークを行い、「三人寄れば文殊の知恵」を実感したという学生が多く見られた。グループでテーマ発表をすすめ

ることは調整も多く困難もあるが、一人では全く思いつかないアイデアや自己のアイデアに他人のアイデアが重なることによって $1 + 1 = 2$ より大きな成果を生むことができることを実感する経験となった。

後期は、グループ毎のテーマを決定するに際し、テーマ選定の話合いに迷いが生じる場面があった。アイデアは発散→混沌を経て収束に向かうが、自分達がどのステージにいるのかを把握しておくことは意味のあることである。また、外部講師による自己のコミュニケーションスタイルのミニ講義により、それぞれの意見が異なるのみならずコミュニケーションスタイルもそれぞれであることの気づきとなった。

ワークショップ

これまでと同様、各回必ずグループワークの時間を設けた。学生からはグループワークの時間がもっとほしいという意見も多くあり、学生同士の違いからの学びは大きく、自分とは異なる意見に多く触れることは多様化する社会では特に重要である。

ツール：Slack

「未来起点ゼミ」のコミュニケーションプラットフォームとして今年度もSlackを使用した。特に後期の「未来起点フォーラム」の運営の関連で全体共有をしたり、運営担当グループ毎にやり取りしている様子が見られた。学生同士のセミナー・イベントなどの情報共有などにも使われた。個別のメールよりもチャンネル毎のやり取りの蓄積が後から確認でき、大勢の情報の見える化に向いているように感じた。今後もこういったツールを積極的に取り入れていきたい。

ブリヂストン従業員のゼミ参加

今年度は初年度から課題であったグループ発表による成果を得るため、グループファシリテーションの底上げが大きな課題であった。また、ブリヂストン従業員のプロジェクト・マネジメントの経験付与の観点から、今年度の新たな試みとして、ブリヂストン従業員7名が前期2～5回の講義にファシリテーターとして参加した。ブリヂストンからの参加者は、2～4回講義を担当するアルバ・エデュの竹内氏の事前ファシリテーション講座を事前に任意受講し、ブレイクアウトルームでのグループワークのファシリテーションを行った。これにより、講義の初期のうちからグループワークの対話の場作りが促進された。また、後期の学生同士のグループファシリテーションに向け、「まと

Table3 2021 年度「未来起点フォーラム」発表テーマ

A グループ (4 人)	人生は誰が主役?～瘦せの問題から生きやすい世の中とは何か考える～
B グループ (3 人)	弱いつなかりで孤独をなくせ!～誰でも歓迎「おしゃべりランチ」で広がる出会い～
C グループ (4 人)	私たちが気軽にアクションを起こせる世の中に!
D グループ (5 人)	全ての高校生に人生の選択肢を!～VLOG で大学生活紹介します～
E グループ (4 人)	「かめライフ」忙しい現代社会に心地よい生き方を
F グループ (5 人)	3I から考える不登校～中一の居場所づくりで社会の生きづらさ軽減を目指して～
IV 生 (2 人)	お茶の樹。お茶大生のつながりで何かを変えよう
IV 生 (1 人)	未来起点ゼミの 2 年間でようやく見えた自分
IV (1 人)	The Personal Is Social～個人的なことは社会的なこと～

めが的確かつ簡潔」、「うまく回して下さってスムーズな議論ができた」などとてもよい手本となったことが振り返りシートからもうかがえた。ただし、1 グループの人数が多すぎることや、タイムキーパーとのマルチタスクなどファシリテーター側の苦慮もあり、来年度以降も同様な試みをするか、また適切な人数と担当割当などはどうするかなど、運営上の課題も今後検討していきたい。

瞑想・マインドフルネス

毎回授業の冒頭に 2 分間の瞑想の時間を設けている。意識的に呼吸の小さな動きに注意をむけることにより集中力を高めて授業に入ってもらいたい意図である。継続による効果を見ていきたい。

オンライン対面併用授業

今年度もコロナの影響で基本オンライン授業であったが、2 回対面授業(ハイブリッド)を行った。昨年の反省も生かし音声対策を行い、全体共有はマイクを使い、グループワークは各グループの声がハウリング等しないよう A～F グループ 6 つの部屋を使い、オンライン参加者となつたプロジェクターを用意するなどした。

上記の成果はもちろん、1 年間の受講を通して、29 名の学生(内、ゼミ生・協生 4 名)はそれぞれ自分のテーマについて調べたり、アンケート調査を行ったり、オンラインイベントを開催したりして、最終的に、1 年間の集大成を発表した(Table3 を参照)。発表内容はファッション、共生社会、教育、情報、生き方など多岐にわたっており、未来の社会を自分の力でよりよくしていくための学生のアイデアと提案がなされた。発表を通して、学生が自分の問題関心を外部の参加者に向けて、堂々と発信できたこと、また、グループで各々の考えや意見を出しあいながら、最終的に一つの

テーマとして収束したことは一番の成果と言える。

今後の課題

以上をみてきたように、3 年目の「未来起点ゼミ」は多くの成果を得られたと言える。特に、1 年目と 2 年目とは違って、3 年目の後期では、グループ発表を目標としているため、数か月間、学生は数人でグループを形成し、年齢、学科、専門を問わず、一つのテーマについて対話し、お互いの考えや意見を共有していた。このようなプロセスでは、自分の考えを自信を持って明確に他者に伝えること、異なる意見と考えを持つ他者の話を傾聴する力、グループの対話を活性化するための工夫など、それぞれの学生は多くのことを学んだと言える。一方で、初めてグループ発表に挑戦したため、グループワークの際に、ファシリテーションの難しさが実感させられるものでもあった。また、「フォーラム」の運営に関しては、役割分担が不透明であるため、学生間のタスクの偏りが見られた。数十人が一緒にオンラインで「フォーラム」を開催するハードルは決して低くなかった。以下、具体的な課題について述べる。

グループ発表

初年度と昨年度は「未来起点フォーラム」でグループ発表を選択するかを学生自身の判断に任せましたが、グループワークにおけるリーダーシップの育成がこのゼミの目的の一つであることを改めて確認し、今年度はグループ発表とした。グループ発表はグループ内でのリーダーシップや対話のファシリテーションが必要であり、前期にブリヂストン従業員のファシリテーション参加や後期に外部からのアドバイス・コミュニケーションスタイルのミニ講義なども取り入れた。授業の企画が難しく、直前で授業の構成を変更することも

あった。外部の知見も取り入れながらより質の高いグループ発表の成果につながるよう来年度以降の重点課題としたい。

「未来起点フォーラム」の運営

今年度のフォーラムも学生主体で運営を行ったが、話合いがなかなか進まないようであった。本番1週間前のリハーサル時に各自の役割を把握していない学生も多く、また一部の学生に運営業務が多く偏っていることが明らかになった。ゼミⅣの学生も話合いのサポートを行い、再度業務分担の見直しを行い、またリハーサルを別日にやり直すこととなった。この点、昨年度は運営にリーダーシップを発揮し、運営全体を把握・調整する学生が数人いたように思う。このような違いは、個人の資質によるのか、今年はグループ発表としたことでメンバー間の相互の心理的な依存があったことが作用したのかなどは明確でないが、業務全体の見える化ができていないことが大きな原因の一つであり、個人の資質に頼るのではなくシステムとして回る形にすることが課題である。プロジェクト・マネジメントの基礎を講義内容に取り入れるなども検討したい。

このような大きな規模のイベントを自分で運営から行ったことはないという学生も多く、各自のリーダーシップ育成のとてもよい機会になり、実際に運営業務を主体的に担当していた学生からもそのような意見があった。ただ、テーマの話合いの時間が削られることもあり、ゼミⅣの学生が運営を担当するという案も検討の余地がある。

バックカスティング

このゼミは「未来起点」＝バックカスティング思考で10年後のありたい姿を考え社会に提言するということをフォーラム発表の目標としているが、バックカスティングの講義は授業初回に行ったものの発表内容への折込みにはばらつきがあるように思われ、より理解を浸透させるための工夫が必要であるように思う。

社会課題提言

本ゼミは学生の最終の成果として社会課題提言の発表を行うものであるが、「現代の生きづらさ」をテーマとする発表内容が多かったように思う。コロナ禍の影響もあると思われるが、グループ発表のためお互いの関心の折衷案的なテーマ選択となったのかもしれない。この点はグループでのテーマの深堀の難しさとして来年度以降の重点課題としたい。なお、学生から自分の興味はエンターテインメントや日本文化の振興など必ずしも社会課題といえるものではないのでどうしたらよいかといった相談もあった。社会価値の創出とする方が学生はテーマを選択しやすいのかもしれない。

次年度は、上記の課題を念頭に入れながら、よりよい実践をおこなっていききたい。

注

- 1)2回のアンケート調査はお茶の水女子大学倫理委員会の承認を得ている。すべてのアンケート調査は匿名の形で行った。教員は事前に「調査協力依頼」をPloneにアップし、了承を得るようにしていた。1回目のアンケート調査については、「未来起点ゼミ」のアカデミック・アシスタント(以下AA)に依頼し、グーグルアンケートで実施してもらった。AAはその後、調査結果を整理し、教員に共有した。2回目のアンケート調査については、教員がグーグルアンケートで実施し、調査結果を整理した。
- 2)インタビュー調査については、AAに依頼し実施してもらった。具体的には、2021年8月5日の13時30分から14時30分まで、15時から16時まで、18時から19時まで、9月30日の16時から17時まで、それぞれ4人の受講生にインタビュー調査をZoomで実施してもらった。調査の前に、教員は事前にAAに調査内容を伝えた上で、インタビュー調査における注意点を説明し、指導を行った。調査実施後、AAは学生の個人名が特定されないような形で、インタビュー調査結果を整理し、教員にメールで共有した。本稿で提示しているインタビューの調査結果はその一部である。

2022年2月4日 受稿